

# 靈 魂 と 肉 體

## 服 部 隆 道

科學的認識の最も重要な分野の中に於て、最も進歩していかないものは心理學である。語源よりすれば心理學は靈魂の學を意味する。然るに靈魂は神學者には良く知られて居るが、科學的觀念としてはほんご看做され得ない。靈魂は最初ギリシャ思想に現れた如くんば、キリスト教的起源ではないが、宗教的起源を有して居つた。そしてギリシャに關する限り、靈魂はピタゴラス學派の教説に始まつた。ピタゴラス學派は靈魂の輪廻轉生を信じ、それが肉體と結合して居る限り受けねばならぬ肉體への從屬からの離脱に依て成立する究極的救済を求めて居つた、ピタゴラス學派はプラトーンに、プラトーンは教文に影響して遂に肉體から判然區別あるものとしての靈魂の教義は、キリスト教の一部となつた。更に他の影響、特にアリストテレスミストア學派の影響が加わつた。然し後期の形態に於けるプラトーン主義は、教父哲學に於ける最も重要な異教的要素である。かくして古代に於てプラトーン的であつたキリスト哲學者の教義は、十一世紀以後、アリストテレス的となり、そしてスコラ學者中の最上なるものと思はれて居るトーマス、アクイナスは今日尙羅馬カソリックに於ける哲學的正統の標準である。

スコラ哲學に於て靈魂と肉體とは共に實體である。實體なる概念は文章論から導出せられ、文章論は吾々の言葉を作つた原始民族の無意識的な形而上學から導かれる。凡そ文章は主語と客語とより成る。そして或る言葉は主語又は客語として起り得るが、主語としてのみ起る言葉がある。之等の言葉は實體を示すを考へられる。同じ觀念に對する一般的

な言葉は物であり、人間に適應せらるゝ時は人である。例へば吾々は、ソークラテスは賢明であり、プラトーンに教へた等と云ひ得る。之等の記述に於て吾々はソークラテスに異つた屬性を内屬する。而して、ソークラテスと云ふ言葉は之等の文章に於て、全く同じ意味を有して居る。即ち人間ソークラテスは彼の屬性と異つた何者かであり、屬性が内屬すると云はれるものである。而して自然の知識は屬性に依てのみ事物を認めしむるから、若しソークラテスと同じ屬性を有する双兒の相手があるならば、彼等を區別する事は出來ないであらう。然し實體は屬性の總和とは異つたものである。

屬性を持ち屬性のいずれか又は總てから區別あるものととしての實體の概念はデカート。ライブニッツ。スピノーザに依て保持せられ、又ロックに依ても多少保たれた。然しそれはヒュームに依て斥けられ、次第に心理學や物理學から除外されるに到つた。

先づ肉體を考へるに、實體の概念が保持されて居る限り肉體の復活とは地上に於て生きて居つた時、肉體を構成して居つた實體の再集する事である、その實體は多くの變形を通つたであらうが自らの同一性を保持して來た。而して肉體の一片は屬性の集る事であり、又其の同一性は屬性の變化と共に失はれる。従つて復活後の肉體が曾ての地上の肉體と同一であること云ふ事は意味をなさない。奇妙にも此の困難は近代物理學に於ても見出される。即ち電子を伴へる原子は不意の變化を受け易く、變化の後の電子は前の電子と同一視され得ない。各々は單に現象をまこめる一方法にして、變化を通して同一性を有する爲に要求されるが如き實在性を持たない。

次に精神に對する考察に於ては、先づ主觀に關して述べねばならぬ。明かに或意味に於て、昨日の私と今日の私は同じである。又私が同時に人を見、彼の話を聞くならば、見る私と聞く私は同じである。而して私が物を知覺する時、私と物との間には主觀客觀の關係がある。然し不幸にして主觀は他のものを知覺して居るが、主觀自身を知覺し得ない。

かゝる點よりヒームは主觀の存在を否定した。然し主體が存しなければ不死なる者、自由意志を有するもの等を説明し得ない。ヒームは之を明かにしようとしなかつた。然し他の人達はヒームの大膽さを缺いて居つた。

ヒームに答へんしたのはカントであり、其の解決の道は曖昧さの爲に深遠であると思はれてゐる。彼は云ふ。感覺に於て物は吾々に働くが、吾々の本性の認識するのは、物本來の相ではなくして、主觀的附加に依て生じたものである。之等の附加物中著しいのは時間と空間である。カントに依ればそれが、時空の中にある様に思はれるが、物自體は時空の中には存しない、従つて物自體としての自我、靈魂は時空中にはない。要するに知覺に於て知り得るのは、現象的自我の現象的對象に對する關係である。然し兩者の背後には眞の自我、眞の物自體があるが、いずれも認識されない。そしてそれ等の存在を假定するのは宗教や道德に必然な爲である。吾々は科學的方法に依ては自我を知り得ないが自我は自由意志を有し時間中に存せず、不死である等の事を知つて居る。かくして純粹理性に於ては神の存在を證明し得ないとなしたカントは實踐理性に於て、之の可能を認めて居る。何故ならばそれは道德の領域に於て直覺し得るものであるからである。かくしてカント説に於ては現象の背後の實在は倫理の要請に依つて認めらるゝと考へられたが、其の後彼の後繼者ヘーゲルに於て、現象は吾々が認識し得る全實在を有する事、並びに認識されぬものに屬する優れた實在を假定する必要はないと考へらるゝに到つた。

靈魂と肉體の關係に對する考察に於て、實體の概念のみならず因果律も同様に近世哲學と兩立し得なくなつた。

凡そ原因の概念は罪と關連して神學に關係して來る。罪は意志の屬性であり、意志は行爲の原因である。然し意欲は必ずしも常に先行せる原因の結果ではない。若しそうであるならば、行爲に對して責任を負ふ可きではない。従つて罪の概念を守る爲には意志は少くも時には無原因でなければならぬ。即ち自からが原因でなければならぬ事が必要であつた。

此の事が精神的出來事の分析並びに精神と肉體との關係に對して多くの命題を生ぜしめ、其の中の或ものは時と共に保持し難くなつた。

最初の困難は機械學の法則の發見に依て生じた。十六世紀に於て、實驗と觀察が「眞なり」と示す様に思はれた法則は物質の運動を完全に規定して居るに過ぎない事が明かになつた。デカルトは動物は自動機械であるを推論したが、未だ人間の意志は肉體の運動を引き起し得るを考へた。然し物理學の進歩は速かに彼の妥協を不可能にし、彼の弟子達をして肉體に對する精神の影響を否定させるに到つた。かくして遂に各自の法則を有する精神的と物理的との並行せる系列の學說を導くに到つたのである。

然し此の學說は信じ難いのみならず自由意志を救ひ得ない。凡そ肉體と精神との狀態間には嚴密な對應があり、一方が知られる場合には他方は論理的に推論され得るを考へられる。此の對應の法則並びに物理學の法則を知り且つ充分なる知識、技能を有するならば、物理的な出來事と同じく精神的な出來事を豫見し得る。兎に角精神的な意欲は肉體的表現が續く事に依て價值を生ずる。物理學の法則は諸君が「今日は」と云つた時に決定する。そして諸君が實際に其の反對を云ふ事を前以て命ぜられて居るならば「左様なら」と云ひ得るを信する事は單なる慰に過ぎない。

從つて十八世紀のフランスに於てデカルト説が唯物論に地歩を譲つた事は驚くに足らぬ。其の唯物論に於ては人間は物理法則に依て全く支配せられ、意志は全く地位を失ひ罪の概念は消失する。靈魂は存しない。故に人間の肉體に一時的に結合して居る分子の不滅以外に不滅は存しない。

一方人間心理學に於て唯物論を嫌つた人は神秘や生命力に逃れた。或物は科學は人間の肉體を理解し得ないとし、又或者は化學や物理學以外の原理に依てのみ、理解し得るを主張した。然しかゝる見解は生物學者には認められない。そして胎生學、生活化學及び有機的合成の人工的產出に於てなされ來つた仕事に依て生物體の特質は化學を物理學の言葉

で益々説明され得る様に思はせる。勿論進化論は動物の肉體に適應される原理が人間の肉體に適應されないを想像する事を不可能ならしめる。

心理學及び意欲の説に還らう。吾々の意欲の多くが原因を有する事は明かであつた。然し正統的哲學者達は之等の原因は物理學界のそれと異つて結果を生じないを主張した。意志は烈しい働に依て強い要求にさへも打勝ち得るを主張した。かくして吾々が激情に依て支配される時、吾々の行爲は自由でない。即ち原因を有するからである。然し理性や良心に従ふ時に、眞の自由が與へられるを考へられる様になつた。かくして眞の自由は道德律に従ふ事と同一視され、更にヘーゲル學徒は道德律と法律とを同一視するに到つた。従つて眞の自由は治安に従ふ事に存するのである。

心理學と物理學が科學的になるに従つて、其の傳統的な觀念は、正確な新しい觀念に壓倒されて來た。最近迄物理學は物體と運動と云ふ觀念に満足して居つたが、如何に科學的意味に於て考へられ様とも、物體は中世の意味に於ける實體であつた。かゝる觀念は専門的にも不充分である事が明になり、そして理論的な物理學者の手續は科學的哲學の要求と益々相應しそふになつた。

心理學に於ては知覺や意識と云ふ觀念が正確でない事が明になつたから、捨てねばならぬ様になつた。之に就て簡敘しやう。

知覺は一見、直截簡明である様に思はれる。然し吾々が太陽を知覺する時、先づ中間の九三〇〇萬哩の空間に於て、後、眼に於て、視神經に於て、腦に於て永い原因的な過程があり、従つて吾々が見たと云ふ太陽は、太陽自身に似て居るを想像する事は困難である。太陽はカントの物自體の如く經驗の外にある。此の事は多くの人が太陽を同時に見、且つ其の光は觀察者の居ない所にも及ぶと假定する事に依て簡單に證明されるを考へられる。然し苟くも知られ得るものならば、それは太陽を見るを名付ける經驗からの困難な推理に依てのみ知らるゝのであつて、感覺の錯雜せる物理的

因果關係を自覺する前に、吾々が知覺すると思はれる様な直接的な單純な意味に於いて太陽を知覺し得ない。然し例へば吾々が人が話すのを聞く時に、吾々が聞く事柄の相違は彼が言ふ事柄の相違に對應する。中間の媒介の結果は大體恒常であるから多少無視し得る。同様に赤の青の布を列べて見る時に、吾々は青の赤の光の來る場所の相違を假定し得る。然し此の相違は赤の感覺の青の感覺との相違に似て居ると思像する事は出來ぬ。かゝる事に依て知覺の概念を救はんを試みるが矢張り正確性を與へる事は出來ない。中間の媒介物は常に吾々を誤解せしめる結果を有して居る。従つて吾々が普通知覺と呼ぶ經驗に依て對象を推理する爲には物理學と生理學を學ばねばならぬ。そして外界の存在を假定するならば吾々は知覺された對象に關して非常に抽象的な或る知識を導出し得るが知覺云ふ言葉に含まれた凡ての暖かさ直接性は推理過程に於て消失する。太陽の如く遠い對象の場合は此の事は理解され易いが、此の事は吾々が觸れ、味ひ、臭ふものに就ても同様に眞である。

意識の問題は更に困難である。吾々は意識して居るが、石木は意識して居ない云ふ。此の意識して居る云ふ時に二つの事柄が含まれて居る。一つは環境に反應する云ふ事であり、他は内省すれば無生物に於ては發見し得ない思想や感情に於ける或る性質を見出し得る云ふ事である。

先づ環境に對する反應に關して考察するに、例へば諸君が「シー」云へば人々は周圍を見廻すが石は見廻さない。そして人が周圍を見廻すのは音を聽いた爲であるに知つて居る。斯様に吾々は刺戟に反應するが又石も反應する。只其の刺戟は極く少ないだけである。かくして外部知覺に關する限り、吾々も石との相違は程度の差に過ぎない。

意識概念の更に重要な部分は吾々が内省に依て發見する事柄に關して居る。吾々は外部に反應すると共に、反應する事を知つて居る。石はそうでないを考へる。若し石が反應する事を知つて居るならば意識を有するを考へる。分析すれば此處に於ても相違は程度の差に過ぎない。吾々が何かを見る云ふ事を知るのは記憶でない限り、見る事を越えた知

識の一片ではない。若し吾々が最初何かを見後、それを見るに云ふ事を反省するならば、内省的であると思はれる反省は直接の記憶である。記憶は或る精神的なものと云ふかも知れぬが決してそうではない。記憶は習慣の一形式であり、習慣は神経組織の特質である。私は上述の事を以て吾々が漠然と意識と呼ぶものゝ完全な分析であるに云ふのではない。只一見正確な概念と思はれるものゝ實は全くその反對であるに云ふ事、並びに異つた言葉が科學的心理學者に依て要求されるに云ふ事を暗示せんとするだけである。

最後に靈魂と肉體との間の古い區別は、精神が靈性を失つたと共に、肉體が不可透入性を失つたが爲になくなつた。今日尙物理學の與件は誰人も見られるに云ふ點に於て公的であり、心理學の與件は内省に依て得られるから私的であるに考へられて居る。然し此の區別も程度の差に過ぎない。凡そ如何なる二人の間も觀點の相違の爲め同時に同對象を正しく知り得ない。そして嚴密に検討すれば兩者の與件に付て公私の區別は立ち難い。二つの科學の出發點をなす事實は少くとも一部分は同一である。吾々が見る色の一片は心理學や物理學に取て同様に與件である、そして兩者の與件は或る意味に於て腦中の出來事と關係して居る。かゝる出來事は物理學に依て研究される外的原因の一連鎖を有すると共に、心理學に依て研究せられる内的因果の一連鎖を有して居る。而して兩者の世界を構成するものゝ間には根本的な相違のある事を證するものはない。今や吾々は物理學、心理學に就て前程も知らないが、靈魂や肉體が近代科學に於て認められないに云ひ得るだけ知つて居る。

肉體の死後靈魂が生存するに云ふ教義は、キリスト教徒並びに非キリスト教徒に依つて、又文明人並びに野蠻人に依て信ぜられた。キリスト教に於ては永生の信仰は常に優位を占めて居る。現代に於て自由主義的キリスト教徒は地獄の永遠性を往々にして認めない。然し十九世紀の中頃迄は凡てのキリスト教徒は永遠の刑罰の實在を信じたのである。そして地獄の恐怖は復活の信仰より生ずる喜びを減少せしめた最も深い心配の源泉であつた。そして地獄の信仰の衰へる

に到つた原因は、神學的議論や科學に依るのではなくして、十八世紀と十九世紀との間に起つた獯猛性の減少に基くのである。更に地獄の信仰の衰へるに従つて天國の信仰が明確性を失ふに至つた。天國は今日尙キリスト教正統説に於て認められて居るが、之に對する議論は薄弱であり、宗教に味方する議論も、來生に關するよりも現世に於ける良き生活を促す宗教勢力に就てなされて居る。そして現生を來世の準備と看做す信仰は以前道德や行爲に勢力を及ぼしたが今や意識的にそれを斥けない人にさへも影響しなくなつた。

不死の問題に關して科學の云ひ得る事柄は漠然として居る。そして此の問題に關して既に役立つて居る證據を判斷するだけの知識を私は持つて居ないが、理性人を信服させるに足る證據の存する事は明かである。然し之に對して除外例が設けられねばならぬ。第一に證據は高々死後生存する云ふ事を證するのみにして永久の生存を證し得ない。第二に強い要求の場合には、習慣的に正確な人の證據を認めることは非常に困難である。第三に他の根據に基いて吾人の人格が肉體を共に死なない云ふ事がありそうにないならば、吾々が前にありそうな假定を考へる際に吾々が要求するより以上に強い生存の證據を要求するであらう。然しかゝる議論が今日檢討する價值を有するは誰も思はない。

科學にまつて、困難は靈魂や自我の如き實體がありそうにない云ふ事實から生ずる。既に述べた如く靈魂や肉體が二つの實體とは看做れない。即ち時間に於ける持續を有するものとして看做す事は出来ない。心理學に於ては知覺に於て客體と關係せしめられる主體を假定する必要はない。又最近迄物質は不滅であるを考へられたが最早や之は物理學の研究方法に依て假定されない。電子を有する實體として原子を考へる事は或る點迄は便利であるが、ある場合の電子は他の場合の電子と同一視されない。かくして近代物理學者はそれ等を實在的とは考へない。一方永久であるを考へられた物質的な實體があつたから、精神も永久的でなければならぬと論ずる事は容易であつたが、強力な議論でなかつた爲に、最早や用ひられない。充分なる理由を以て物理學者は分子を出來事の一系列に歸し、心理學者は精神は單一の持



續するものゝ同一性を有せずして、緊密な關係で結び付けられる出來事の系列である事を明かにした。故に不死の問題は之等の緊密な關係が肉體に結び付て居る出來事と肉體の死後起る出來事との間に存するや否やと云ふ問題になつて來る。

此の問題に答へる前に、或る出來事を人間の精神生活たらしめる様な方法で出來事を結びつける關係を決定せねばならぬ。之等の關係中著しいものは記憶である。私が記憶し得る事柄は私に起つた。又私が或る場合を記憶し得て、其の場合の外のものを記憶し得るならば其の外のものは私に起つた。之に對して二人の人間が同じ出來事を記憶し得ると云ふ事が反論として主張されるかも知れないが、それは誤りである。即ち如何なる二人の人間も觀點の相違に依て同じく物を見ない。私の經驗は他人の經驗と似て居るかも知れないが多少は常に異つて居る。各人の經驗は各人にまつて私的であり、或る經驗が他の經驗を思ひ出す事に存するならば其の二經驗は同じ人に屬する。

肉體から導き出される餘り心理的でない他の定義がある。異つた時に於て肉體の同一を形成するものゝ定義は錯雜して居るが暫くそれを認め、又精神的な經驗は肉體に結び付て居る事を認めよう。かくして吾々は與へられた肉體と關連せる精神的な出來事の系列として人間を定義する事が出来る。之は法律の定義ある、即ちミスが殺人を犯し、後に警察が彼を逮捕すれば其の時肉體に宿つて居る人間は殺人者である。

人間を定義する之等の二方法は二重人格の場合には衝突する。かゝる場合には外面的に一人の人が主觀的には二つに分裂して居る。時には兩者其他を知らぬ事があり、此の場合に記憶が人間の定義として用ひられるならば二人の人が居る事となり、肉體が用ひられるれば一人しか居ない。此の事は人間の定義として記憶を用ひる事に困難を生ずるが、失われた記憶は催眠術等に依て回復され得るから、此の困難は恐らく打勝ち得るであらう。

現實の記憶に加ふるに多少記憶に似た他の要素、例へば習慣等が入つて來る。經驗が單なる出來事と異なるのは生命の

ある所では出来事は習慣を形成するからである。そして出来事が習慣形成に關係する特種な方法で他に因果的に關係して居るならば二つの出来事は同一人に屬する。之は記憶のみの定義より廣い定義である。

若し吾々が肉體の死後個人性の存続を信す可きならば記憶又は習慣の持續を假定せねばならぬ。然し生理學は之に反對を唱へる。習慣や記憶は肉體特に腦に對する影響に基いて居る。かゝる影響は死に依て消失する。従つて奇蹟に依らずして之等が次の生の新しい肉體に移るに考へる事は出来ない。若し吾々が具現化されぬ精神である可きであるならば困難は増加するのみである。實際私は近代の物質觀を以てしては、具現化されぬ精神が論理的に可能であるか否かを疑ふ。物は出来事をまこめる一方法にして従つて物は出来事のある所に存する。彼の肉體の生を通じての人間の持續は私の主張の如く習慣形成に依るならば又肉體の持續に依らねばならぬ。従つて水路を同一性を失ふ事なくして天國に移し得るならば人間を天國に移す事も可能であらう。

個人性は本質的には組織のものである。そして或る關係に依てまこめられた出来事は人間を形成する。此のまこめる事は因果律に依て影響される。そして因果律は記憶を含む習慣形成に結び付いて居る。そして習慣形成に結び付て居る因果律は肉體に依つて居る。若し此の事が眞實であり、且つ科學的根據があるならば個人性が腦の破滅後存続するに豫期する事はクリケット俱樂部が其の成員を失つた後も存続するに考へる様なものである。

私は此の議論が決論的であるに云ふのではない。云ふ迄もなく科學特に心理學の未來を豫知する事は困難である、恐らく心理學的な因果は肉體に依存して居る事から開放されるであらう。然し現在の心理學や生理學に於ては不死の信仰は科學に依て支持されない。そして此の問題に就て可能な議論は死に於て個人性が死滅する事を示して居る。私達が存続しないのは殘念である。然し迫害者や山師等が永續的存在を續けないと思ふ事は愉快である。彼等はやがて良くなるだらうと思はれるが私はそれを疑はざるを得ない。『バートランド、ラッセルの「宗教と科學」の中より。』